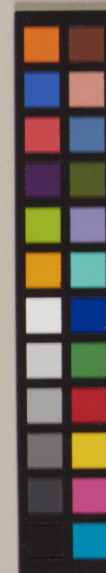
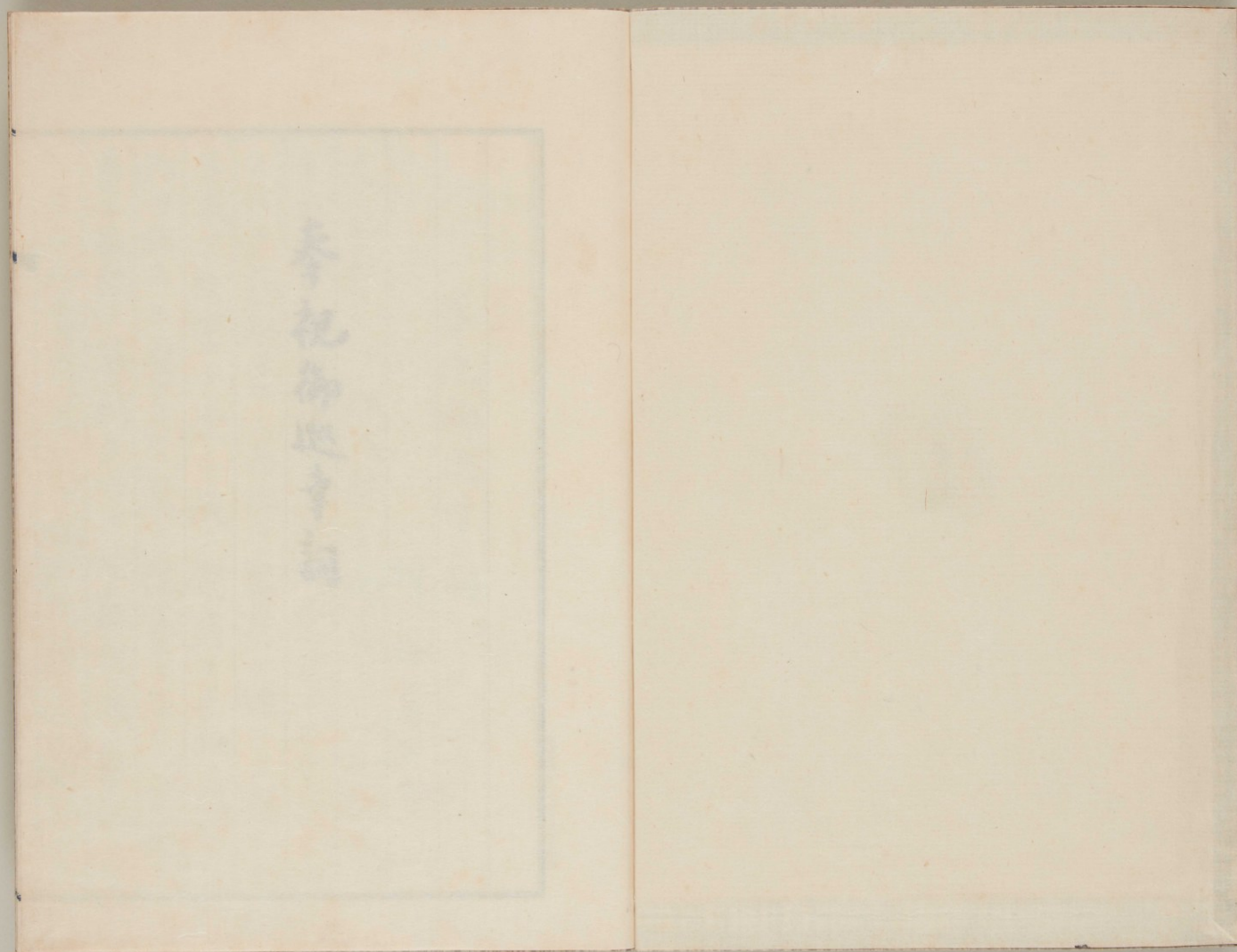


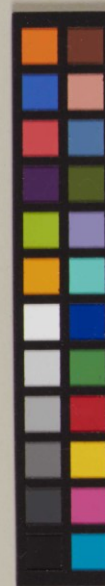


18
33

奉祝御巡幸詞
坪谷善四郎識



奉祝御巡幸詞



6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4



奉祝御巡幸

神皇正統記 卷之九

奉祝御巡幸詞

坪谷善四郎 平民

夫東面スレバ西戎怨ミ南面スレバ北狄怨ム
トハ我々聰明英智ナル天皇陛下ノ聖德ヲ頌
スルノ語歟曩ニ西強ニ東遠ニ巡シテ親シク
下民ノ疾苦ヲ察シ廣ク衆庶ノ言路ヲ開キ其
治ヲ施スニ當テヤ殊ニ休養ヲ旨トシ節儉ヲ
尊ヒ非常ノ英斷ヲ以テ地祖節臧ノ恩詔ヲ下
シ至ヒ今年戊寅後々我々北陸道ニ巡シ玉フ

之カ民タル者ハ貴トナク賤トナク簞食壹漿シ
テ御輦ヲ迎ヘ修メズ飾ラズ各々平素ノカムル
所ヲ以テ天覽ヲ仰キ吾儕小民當ル所ノ曝布ノ
賤業モ亦驥尾ニ附テ其ノ榮ヲ被ルヲ得上ハ以
テ聖慮ノ萬一ニ供シ下ハ以テ該業ラシテ益ミ
四方ニ鳴サントス嗚呼吾儕小民豈感泣シテ竟
詭舞歌セサルヲ得ンヤ仰テ旭旗ノ影ヲ視テハ
國威ノ益ミ揚ランコトヲ冀ヒ伏シテ輪蹄ノ響
ヲ聞テハ仁風ノ愈ミ普ネカラントヨ期ス謹
テ祝詞ヲ述ブ

明治十一年九月明治天皇北越御巡幸ノ際同
月二十一日南蒲原郡上條町加茂川大橋ヲ御
通輦アラセ給フ當時余等上條町及其上流ノ
狭口村住民中加茂川ノ清流ヲ利用シテ綿布
漂白ヲ業トスル者相謀リ其ノ作業ノ狀況ヲ
天覽ニ供シ奉ラント欲シ當日多數ノ綿布ヲ
加茂川大橋上流ノ河原ニ展ゲ水ヲ撒キ注ガ
者綿布ヲ盤上ニチツ者各々平生ノ如ク其業
ニ従ヒタリ而シテ陛下ニハ畏ルモ天機嚴ハ

シテ御馬車ヲ徐行セシメサセテ車窓ヨリ殿
覽ヲウセ給ヘタリ時ニ御輿薄ニ随行シテ行
幸治道ノ光景ヲ叙シタル東京日々新聞記者
岸田吟麿が御巡幸記事第二十七報トシテ同新
聞明治十一年九月二十日ノ紙上ニ

夫より田向の道を東南に過さば玉ひてか
茂と倭うせ玉ふ折うら橋の上より殿覽あ
らせらるゝに水清く砂明にして自から西
京のおちかげ有るに河原に布さへ多く晒
したるハ所の名に似つうハ一と父思ふ

皇居の殿上
キリキリ文庫蔵

玉ひけん十二時ごろ加茂驛に着かせ玉
ひて市川厚次郎かくに御書食と召し上ら

トアルニテ當日ノ有様ヲ知ルヲ得此日曝布
ノ狀ヲ殿覽アラセ玉ヒシヲ無上ノ光榮トシ
余ハ前ニ掲ケタル一編ノ祝詞ヲ物シテ行在
所へ奉呈シタリシニ其後畏クモ此日天覽ヲ
辱ウセシ綿布漂白業者一同へ金一封御下賜
ノ恩寵ヲ辨シ且ツ當時行幸治道士民ヨリ上
リタル祝文詩歌ヲ宮内省文学御用掛高崎正

風ニ命シテ集ノ^(死)出^(出)ル^(出)宮内省ヨリ出版也
ラレタル「千村の花」ノ中ニ拙ナキ余ハ祝詞
ヲモ編入セウレタリ(全六巻中第ニ巻ハ十八
丁以下)時ニ余年尚未ダ十七歳不学短才ニシ
テ殊ニ野人禮ニ習ハズ其祝詞ハ全タク體ヲ為
サズ今之ヲ讀ノバ恐懼^ヒ慚^ハルモノアリ而
シテ當年ノ上條町狹口村トモニ加茂町ノ一部
トナリ曾テ水清リ砂明カナリト稱セラレタル
加茂川ハ今ハ流レ瘦セ水汚レテ綿布漂白ノ
業モ漸ヤリ廢絶セラレントス往時ヲ追憶シ

昭和十年四月十四日

シテ感慨頗ル深シ偶タマ郷人南真次郎永井
栄松ノ二君来リテ余ガ東京ノ寓居ヲ訪ハレ
當時明治天皇陛下ニ奉呈セル祝詞ノ稿ヲ求
メラレシ故一字ヲモ改メズシテ其儘録シ且ツ其
由来ヲ附記シテ送ルト云角

昭和十年四月十四日

坪谷善四郎識



